

巻頭言 「総合知」で貢献を

小松昭英
ものづくり APS 推進機構

去る3月12日（火）の日経新聞・全面広告欄に、毛利衛日本科学未来館長が「世界とつながり「総合知」で貢献を」という見出しで、「欧米はじめ、個人主義が世界の主流となっていますが、相手を思いやる心を持って最善を尽くすという日本人の意識、知識倫理観に裏付けられた文化は成熟しており、世界の共感が得られます。ごく普通の一般の人でも俳句を読む感性の豊かさは他ではあまり見かけません。その意味で科学技術も文化としてとらえ、『総合知』として日本の力を打ち出し、世界に貢献していくことが重要です」と述べ、さらに科学未来館の宣伝に移り、「科学技術はどんなところで生きるのか・・・経済に限らず、政治、宗教、音楽、スポーツなどそれぞれがタコつぼに陥りがちな専門分野の最先端に切り込み、融合させることで新しい価値を創造することも未来館の役目です」と結んでいる。

確かに、東日本大震災で見せた一般市民の沈着な行動は世界の称賛を浴びたが、一方行政、電力会社と専門家が見せた醜態は一日本人固有の意識かもしれないが一世界に「生き恥」を晒したといえよう。毛利館長の言葉を借りるならば、まさに「経済に限らず、政治、宗教、音楽、スポーツなどそれぞれがタコつぼに陥りがち」どころか、まさに「陥っていた」ものといえよう。

今や、我が国の「縦割り社会」は、世界的に有名で救い難い状況にあると認知されているといわれている。もちろん、「縦割り構造」は我が国以外には皆無というわけではなく、多かれ少なかれ程度の差はあっても存在しているようであるが、科学技術に関しても、科学技術界それ自体が縦割りになっているだけでなく、政治や行政がそれを助長しているように思われる。毛利館長には、「融合させることで新しい価値を創造することも未来館の役目」というのであれば、そのような我が国の縦割りの弊害を指摘した上で、その処方箋を提示して欲しかったところである。

そもそも、我が国は構想力に欠ける国民性を持っているかのような発言が時々見受けられるが、これは明治維新以来の先進国に追いつけ追い越せという目標を、歴史に残るスピードで達成したことから齎されたもので、一時的なもので未来永劫に続くような国民の本性ではないと信じるものである。しかし、先進国に伍してトップランナーとして走れるようになるのは、そう簡単ではないであろう。まさに、社会的な課題で、根の深い多面的な問題だからである。この課題にまともに挑戦する、あるいは挑戦できるのが、「総合知学会」であるといえよう。